

子宮がん検診（施設）

動 向

平成24年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん17,566名（前年度比1,245名減）、体がん774名（前年度比270名減）で、受診者総数は前年より大幅に減少した。また頸がん受診年代は40歳から50歳代が8,901名の50.6%で、体がんの40歳から50歳は573名で74.0%が占めている。

受診者の大半は、健康保険組合の保健事業として総合健診や人間ドックと併用している方々で任意型検診である。

子宮頸がんの原因の大きな要因であるヒトパピローマウイルスは一般的なウイルスで、感染しても免疫力により自然に治る場合がほとんどである。しかし、ウイルスが消えずに感染が続くと、細胞に変化があらわれるなどして、がんになっていきます。

子宮頸がんは、50歳以上では減少しているが、20代・30代の女性が罹るがんの中では乳がんに次いで多い為、我々は「予防できるがん」「検診により発見できるがん」を念頭におき、若い世代の受診率向上を目指し検診の必要性を説いていく必要があると考えます。

結 果

（1）子宮頸がん検診

平成24年度の子宮頸がん検診受診者数は17,566名であった。年齢階級別受診者数は40歳代が最も多く28.2%であり、次いで50歳代22.4%、30歳代19.2%の順であった。子宮頸がん、異形成の発生頻度が高いとされている29歳以下の受診者の割合は8.1%と極めて低く、若い世代の受診を促す方策が望まれる。初診の割合は総数で24.8%あり、前年よりやや減少した結果であり、年齢階級別では、29歳以下が18.1%、30歳代が28.9%、40歳代が29.7%であった。がん患者の発見には、初診率の向上も必要である。子宮頸部細胞診の要精検率0.66%、要再検率1.17%、両者合わせた要再精検率は1.83%であった。再精検受診者321名の中から、子宮頸がん13名と異形成51名（軽度37、中等度11、高度3）が検出された。

子宮頸がん発見率は、再診では0.02%であるのに対して、初診で0.25%と高く、初診の受診者から多くのがんが発見された。年齢階級別では、29歳以下0.07%、30歳代0.15%、40歳代0.10%、50歳代0.05%、60歳代0.00%、70歳代0.10%であった。若年令に多くがんが発見されており、若年令層の検診率の向上が必要である。発見された頸がん13例の病期は0期12名、Ia期1名であり、すべて初期がんであり、幸い進行がんは見られなかった。

異形成発見率は0.25%（初診0.17%、再診0.19%）であり、年齢階級別では、20歳代0.28%、30歳代0.39%、40歳代0.20%、50歳代0.08%、60歳代0.10%であった。若い世代の検診の必要性を示している。

（2）子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は774名で、子宮頸がん受診者数の4.41%であった。平成22年度が1,178名、平成23年度が1,044名であり、かなり減少した。平成18年度にがん検診指針が改正され、不正性器出血などの有症状者及びハイリスク者は、第一選択として医療機関の受診を勧奨することになった。そのため施設検診での子宮体がん検診受診者数は激減している。774名の受診者の中から、要再検0名、要精検3名（疑陽性1、陽性2）が検出された。この3名の精密検査が施行されたが、子宮体がんは2名見られた。

年齢階級別に見ると、子宮頸がん検診受診者と異なり、子宮体がん検診受診者は比較的高齢者に多く、50歳代41.1%、40歳代32.9%、60歳代15.4%、70歳代5.7%の順であった。子宮体がんが見つかった2名は、50歳代と70歳代が1名ずつであった。

（3）卵巣がん検診

平成22年度の受診者数は239名で、内訳は一次検診179名、二次検診60名であった。一次検診179名の中、卵巣腫瘍が判明した人が11名（6.1%）あり、二次検診に移行した。二次検診では、問診、内診、経膈超音波検査、腫瘍マーカー採血などで、定期的に卵巣腫瘍の経過を観察している。

関係の集計表は88頁に掲載